

ジョージ・ハーバートと 聖なる血としてのワインのイメージ

——「苦悶」に見るイエス・キリストの罪と愛——

山根正弘

はじめに

17世紀イギリスの宗教詩人ジョージ・ハーバート (George Herbert, 1593-1633) の詩集「教会」(1633年刊『聖堂』所収)には、心の葛藤や神との対話を伝える作品が多く納められている。だが、そういった旧約の詩編を彷彿とさせる個人的な内的独白の詩は、見方を変えれば、同じ事柄で心悩ませる者に対して範例とも手本ともなり得る。実際のところ、ハーバートは自分の作品に広く一般の人々を啓蒙する教育的意図を持たせていたのではないかと思われる。例えば、祭壇や翼の形をした図形詩や寓話仕立ての物語詩を織り交ぜ、読者が退屈しないように教訓を説いたり、身近な動植物そして家庭的な事物をイメージとして用い、抽象的な概念を具体的なものに置き換え、彼らの理解の一助にしている。

ハーバートは晩年の3年間をソールズベリー近郊の鄙びた村ベマトンで教区司祭として過ごした。彼は教区の人々に仕事の手を休め、主の教えや説教に耳を傾けてもらうために様々に工夫を凝らしたという。その一つの方法は、込み入ったレトリックを駆使せず、ステンド・グラスの如く、日に見える形でわかりやすく提示することであった。聖職者兼詩人にとっては、教会堂にあるものはすべて神の栄光を表し、家の壁でさえ聖書の言葉を書き付ければ、無為な存在ではなくなるというのである¹⁾。

教区司祭としての実務経験をもとに、田舎司祭のあるべき姿、果たすべき役割などを克明に記したのが『聖堂の司祭』(A Priest to the Temple, 1652)、あるいは『田舎司祭』(The Country Parson)として知られる散文の作品である。ハーバートは『田舎司祭』第22章で、教区内で行うべきサクラメント、つまり洗礼と聖餐についてその意義、手順などを論じている。後者に関しては、例えば、聖餐を授かることができるのは、一定の年齢に達したからではなくて、その意味するところ、すなわち普通の食事と違った特異性を認識しているかどうかである、と規定している²⁾。ではいったい聖餐の特異性とはどういうことであろうか。はたして、詩人は聖餐の重要性を詩ではどのような形で具体的に表しているのであろうか、その一端を「苦悶」(“The Agonie”)と題する詩のなかに探ってみたいと思う。

I 罪と葡萄搾り器としてのゲッセマネ

ハーバートの詩を読み解く上で重要な鍵となる概念は対をなしている場合が多く、罪と愛もその一対である。この対概念が「苦悶」で、イエス・キリストが流す贖いの血に関連して扱われている。第1連の出だしはこうである。自然科学者はこれまで山の高さを測り、海の深さを測るなどして自然界を隈無く探索してきた。だが、心の世界には、まだ十分究明されていない広大な領域があるとして、罪と愛の二つを挙げる。そして、第2連では、まず、罪を認識する方途が具体的に示されるが、それはオリーブ山にあるという。

... there shall he see

A man so wrung with pains, that all his hair,

His skinne, his garments bloody be. (“The Agonie” 8-10)

ルカ福音書によると、イエスは最後の晩餐を終えたあと、オリーブ山の麓のゲッセマネの園で、これから立ち向かう受難に備え、血の汗が滴り落ちるほど祈ったと

いう (Luke 22: 44)。また、ハーバートの「犠牲」、イエスが語り手となり、受難を振り返り独白するという枠組みの詩では、ゲッセマネで流すのは「血の涙」となっている (“The Sacrifice” 22, 149-50)。いずれにしても、ゲッセマネとは、語源的にオリーブの実から油を搾る器械のことであり、イエスはあたかも圧搾器にかけられ、オリーブ油ならぬ血液を搾り取られるかのようである³⁾。ゲッセマネはまことに悶え苦しむイエスに相応しい場所と言わなければならない。

苦悶するイエスが血の汗、血の涙を流すのであるから、その拷問の器械は、オリーブ搾り器 (ゲッセマネ) よりも葡萄搾り器 (winepress) の方が相応しい。旧約のイザヤ書に、酒槽^{さかぶね} (winevat or winefat) を踏み赤い衣を身に纏うという記述がある (Isaiah 63: 1-3)。これは主の怒りと報復の血を表し、キリスト受難の原型と見なされる。血の色がワインを連想させ、葡萄搾り器への転換を促している。イザヤ書の酒槽が福音書では圧搾器へと進化し、キリストが受ける苦しみも増幅する。

Sinne is that presse and vice, which forceth pain

To hunt his cruell food through ev'ry vein. (“The Agonie” 11-2)

1570年頃の民衆版画に、イエスの血が教皇によって樽に詰められる「神秘の (ぶどう) 圧搾器」というのがある⁴⁾。それから判るとおり、キリストを圧搾器にかけ血を搾り取るという考え方は、当時としてはさほど珍しくはなかった。だが、引用の詩行では、外圧をかけ液汁を搾り取るという観点から一歩踏み込んで、その内側では別の力が働いて、脈管内の血液を押し出させる様子が描かれていて、その点はハーバート特有の見方である。内なると力は、何であろうか。ハーバートが若いころから苦しんでいた病気であろうか。自伝的要素が色濃く反映している「苦惱」(1) (“Affliction” [1]) と題する詩には、血管内に巣くう瘡^{おこり}が描かれている。

My flesh began unto my soul in pain,

Sicknesses cleave my bones;

Consuming agues dwell in ev'ry vein,

And tune my breath to graones. (“Affliction” [1] 25-8)

瘡は、確かに、肉体を苦しめ呻き声を上げさせるが、血を搾り取ることはない。それに、餌・食べ物を探し回るといふ観点からすれば、病気というよりも、何か生き物のような存在であろう⁵⁾。

ハーバートが愛読・愛用した詩編の59番では、流血の罪を犯す敵が餌食を探し求める犬に喩えられている。サー・フィリップ・シドニーの遺志を受け継ぎ、その妹ペンブルック伯爵夫人がパラフレーズした詩編59番は、6行1連の構成で、押韻形式は ababcc であり、「苦悶」のスタンザそして押韻形式と同一であり、さらに祈禱書そして欽定訳聖書に収められている詩編と較べると、より鮮烈で具体的なイメージとなっている⁶⁾。

As hounds that howle their food to gett,

They runn amaine

The citie through from street to street,

With hungrey maw some prey to meet. (Sidneian Psalms 59: 27-30)⁷⁾

ハーバートは血を搾り出す拷問のイメージに、餌を求めて体内を巡る犬を援用したのであろうか。獲物を執拗に追いかけるという点は同じであるが、探し求める領域が街の通りと体内の血管という違いがある。たしかに、「苦悶」の詩行では、“pain”と韻を合わせるために“street”ではなく、“vein”を用いざるを得なかったと考えることはできる。というのも、ハーバートはやはり、先ほど引用した詩「苦悩」(1)においても同様に、“pain”と“vein”とに韻を踏ませていて、対となる押韻のパターンと考えられる。だが、押韻の工夫だけでない要素があるように思われる。

そこで思い起こされるのが、体内の暗闇の世界に蠢き、脈管を行き来するモグラである⁸⁾。ハーバートは、「苦悶」そして「苦悩」(1)と同様、6行1連の構成で ababcc の尾韻を持つ「告白」(“Confession”)と題する詩で、苦悩がモグラの

如く体内の血管を巡り、情け容赦なく獲物を狩る様子を描いている。

We are the earth; and they,
Like moles within us, heave, and cast about:
And till they foot and clutch their prey,
They never cool, much lesse give out. ("Confession" 13-6)

祭儀の規定を示したレビ記によると、モグラは不浄の動物で、食べても死骸に触れてもいけないという (Leviticus 11: 29-30)。また、イザヤ書では、モグラは偶像崇拝の徒を象徴している (Isaiah 2: 20)。このように、旧約聖書ではモグラはネガティブな扱いを受けている。イエスの聖なる体内にモグラが蠢くとは、ハーバートの時代デコーラムに違反する描写であったと思われる。しかし、宗教詩としていかに不適切な比喩表現であったとしても、人々の信仰の深化に役立てば、あえて使うだけの価値はあろう。当時のイギリス人に、身近な小動物モグラを宗教詩に不相応なイメージとして用いることにより、イエスが苦悶する様子がより一層鮮明に伝わってくる。

ハーバートは『田舎司祭』の第34章で、詩編59番11節の「力の神」を引用しているが、その詩編に現れる印象的な「獲物を求めて徘徊する犬」のイメージは、残念ながら彼の詩や散文では用いていない。一方、モグラの方は「教会」内でシミリーとして2度使用されていて、体内の血管を巡り獲物を狩るイメージとしては、飢えた犬より相応しいと言えるのではないかと思う。

このように、ハーバートは「苦悶」の第2連で、イエスが悶え苦しみながら流す血及びその姿を示すために、葡萄搾り器を拷問の道具として用いた。だがその圧搾器は彼の考案によるものではないが、そのイメージの敷衍に獲物を狙うモグラを詩行に埋没させ、身体の内側からも血液を搾り取り苦悶を増幅させた点は、身近な生き物を使ってキリストの教えを具象化させるハーバート独自の創意工夫である。

だが、罪を認識する方途を示す第2連で大切なことは、搾り取られたイエスの血が罪といかなる関わりがあるかということである。人間同士が盟約関係を締結する

とき、飲み食いを共にすることが多い。血の繋がりのない者同士は、犠牲の血を流し、共食の儀式を持つことで、互いの絆を強めるのである。また、当然そのときには、これまでいかなる怨恨があったとしても、水に流されることになる。人間の盟約と同じように、旧約の神がイスラエルの民と契約を結ぶとき、共餐するかどうかは別にして、祭司は小羊などの生け贄獣を屠り血を取り、食事を供する⁹⁾。旧約のエレミヤ書には、新たに契約が結ばれるときには、これまでの罪が赦されると記され (Jeremiah 31: 34)、新約のヘブライ人への手紙では、イエスは^大祭司として山羊や子牛の血ではなく、自身の血によって、永遠の贖いを成し遂げたとある (Hebrews 9: 12)。従って、ゲッセマネでイエスが流す血は、新たな契約と罪の赦しを表していると考えられる。イエスがゲッセマネに向かうまえに、弟子たちと最後の晩餐をとりながら、「皆、この杯から飲みなさい。これは、罪が赦されるように、多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である」 (Matthew 26: 27) と暗示的な詞を言ったのもこのためであった¹⁰⁾。

主の晩餐が催されるのは、過越祭・除酵祭のときであり、イエスと使徒たちは、種入れぬパンと生け贄の小羊の血の代わりに、パンを裂きワインを飲んだのである。小羊の血はイエスの血となり、最終的にはワインへと変わる。ハーバートの「葡萄の房」と題する詩の最終連では、イエスは「葡萄搾り器にかけられ、その結果、律法の酸い搾り汁から甘美なワインができた」 (“The Bunch of Grapes” 27-8) とある。イエスがゲッセマネで流す血の滴りは、来るべき本当の受苦の前兆で、そのとき罪の赦しが全うされるとともに、肉と命を繋ぐ聖なる血は、愛の力によってワインへと変わる。

II 愛と血の奔流としての十字架

イエスは人間が犯した罪のために、圧搾器にかけられるが如く悶え苦しみ、全身から血の汗及び涙を流す。罪を知りたい者は、オリーブ山の麓のゲッセマネに赴き、罪の贖いのために苦悶するイエスを瞑想しなければならない。ところが、「苦悶」

の第3連（最終連）では、イエスは愛の力によって、血の汗がじわじわと滲み出る滴りどころではなく、溢れ出る奔流のように血を流す。愛を認識する方途は、十字架にあるという。

Who knows not Love, let him assay
And taste that juice, which on the crosse a pike
Did set again abroad; then let him say
If ever he did taste the like. (“The Agonie” 13-6)

イエスはゲッセマネで最後の祈りを済ませたあと、逮捕処刑される。ヨハネ福音書によると、イエスは十字架上で、ヒソプで清められた酸い葡萄酒を口に含んだあと息絶る。そのあと兵士の一人が槍でイエスの脇腹を刺すと、そこから血と水が流れ出たという（John 19: 28-34）。それを踏まえ詩行では、イエスの身体はワイン樽か革袋に喩えられ、脇腹を槍で突かれると、栓を開けたが如くワインとしての血が迸る。

新約で起こる出来事は、すでに旧約に現れていると考えるのが予表論^{タイポロジー}であるが、その考え方によると、イエスの脇腹から迸る血という対^{アンチタイプ}型は、出エジプト記に見い出される（Exodus 17: 1-6）。モーセがイスラエルの民を引き連れ、シンの荒野からシナイ山に向けて進んでいるときのこと、水不足に陥り、主導者モーセに対して不平不満がつゆる。民はモーセを石で殺害しようとした。そこでモーセは、杖を取り岩を打ち、そこから水が湧き出て、民の渇きは癒され怒りがしずまったという。杖と岩はモーセの奇蹟を表すとともに、来るべき約束実現の手付けとなっている。ハーバートは「犠牲」で、「岩からおびただしい量の天上の祝福が絶えず流れ出る」（“The Sacrifice” 170-1）と言い、また「知られざる愛」では、「大きな岩の脇から溢れ出る、血の奔流」（“Love Unknown” 14-5）と記している。モーセの奇蹟を前提とし、杖は兵士の槍となり、岩はイエスの脇腹となる。

罪の認識方途を示す第2連では、イエスを拷問する器械は、葡萄搾り器であった。じわじわと滴るように血が搾られる。それに較べると、愛を知る方途を示す第3連

では、致命傷を負わず槍となり、イエスの傷口は、全身が扉になったかのように血が迸る。聖なる血は、出エジプト記の岩から迸る水とダブリ、干涸らびた人々の心を潤す。

ところで、土地を肥沃にする方法の一つは、ハーバートが『田舎司祭』第32章で紹介しているように、土地に水を引き溢れさせることである¹¹⁾。当地の領主であり、ハーバートの庇護者、ペンブルック伯ウィリアム・ハーバート及びその弟フィリップ・ハーバートによって導入されたばかりのこの灌漑農法は、ハーバートが担当していた教区ベマトン界限で、司祭館及び教会堂の近くを流れるエイヴォン川の支流、ナダー川から取水し実際に行われていた¹²⁾。ハーバートは、その川沿いを散策しながらソールズベリー大聖堂まで通っていた。彼は、見慣れた灌漑をイメージとして、「聖霊降臨祭」(“Whitsunday”)、「ユダヤの民」(“The Jews”)などの詩で用いている¹³⁾。

ハーバートがイエスの脇腹から鮮血が迸ると言うとき、彼は灌漑のイメージを踏まえ、聖なる血が罪に汚れた人の心に洪水のように流れ込み、豊饒にすると心に思い描いていたに相違ない¹⁴⁾。創世記で、大洪水のあとノアが大地に降り立ち、農夫として始めた仕事は、ワイン用の葡萄畑を造ることであった。イエスは、ノアの仕事を受け継ぎ発展させたと考えられる。なぜなら、「苦悶」の第3連の最後の2行では、脇腹から流れ出る命の血は、ワインとなるからである。

Love is that liquor sweet and most divine,

Which my God feels as bloud; but I, as wine. (“The Agonie” 17-8)

さらに、ハーバートがワインと言うとき、彼は国教会に属する聖職者であったので、当然のことながら、まず第一に想起されるのは、聖餐式のワインである。「犠牲」では、

For they will pircce my side, I full well know;

That as sinne came, so Sacraments might flow: (“The Sacrifice” 246-7)

とある。イエスは脇腹を突かれ、罪としてのイヴがアダムの脇から生まれたように、そのように脇腹からサクラメント、つまり聖餐のワインが流出する。

聖餐を受けるとき、パンとワインが物質的にキリストの肉と血に変化すると考えるのが化体説 (transubstantiation) であるが、国教会の教区司祭であったハーバートの場合、あくまでも象徴的な意味において、人間の罪のため犠牲獣のように血を流した主イエス・キリストの愛を瞑想しながら、「教会」内でワインを聖餐台に供するのである。従って、「多くの人は卓上で主の聖なる血を、単なるワインとして飲む」(“Love Unknown” 40-1) ののである。

犠牲となるイエスは、罪の贖いのためにおびただしい量の血を流す。血は体外に出たとたん腐り始める。だが、ワインはオリーブ油と同様に、ある程度時間の経過に左右されず、永遠なるものを垣間見させる液体である。聖なる血はワインとなって初めて、イエスの死後、我々が日々積み重ねる咎を清算することができる。

「良心」と題する詩でも、聖なる血はワインと同一視され、それを飲むことで汚れた心を洗浄し、血肉を新しくする (“Conscience” 14-5)。ハーバートにとり、ワインとしてのイエスこそが、すべての罪を赦す愛の証である。

結び

ハーバートは「苦悶」と題する詩のなかで、罪と愛という対概念を取り上げ、旧約・新約聖書を背景に身近なイメージを駆使しながら、それらを具体的に目に見える形で提示した。罪を知るにはオリーブ山の麓のゲッセマネの園に赴き、この世の最後の祈りを捧げるイエスの苦悶の様子を瞑想しなければならない。祈りの最中、イエスは葡萄搾り器にかけられ血を搾り取られるが如く、血の汗、血の涙が地面に滴り落ちる。血の滴りは、罪の赦しを表しているが、来るべき本当の苦難の予兆でもあった。

愛を知るには磔刑の十字架に思いを巡らせ、死んだあとまで槍で脇腹を刺されるイエスの受難を黙想しなければならない。イエスの身体はワイン樽か革袋に喩えら

れ、脇腹の傷口から血が溢れ出る。イエスは、過越の生け贄の代わりに、自分自身を犠牲とし血を流し罪の贖いをした。イエスの脇腹から迸った聖なる血は、ワインと転じ聖餐台に載せられ、その重要性・象徴性を認識し飲む人の血肉となるばかりか洗い清めもする。ワインとしてのイエスこそ、ハーバートにとって愛の証である。

ハーバートは罪と愛を具象化するのに、葡萄搾り器と槍という伝統的な拷問の器械と武器を用いるだけではなく、当時のイギリス人によく知られ身近な存在であったモグラと担当の教区で導入されていた灌漑のイメージを援用した。特に前者は宗教詩には相応しくないイメージと考えられるが、ハーバートは聖職者であるまえに詩人で、込み入ったレトリックを捨て去る態度を表明しているものの、比喩表現を完全に放棄したのではなく、隠すように努めたのである。モグラは隠れた技巧の一つである。

注

- 1) F. E. Hutchinson, ed., *The Works of George Herbert* (1941; Oxford: Clarendon Press, 1972) 240: “Even the wals are not idle, but somthing is written, or painted there, which may excite the reader to a thought of piety. . .” (*The Country Parson* Ch. 10) ジョージ・ハーバートの詩及び散文の引用は、上記の版による。なお、詩の邦訳は、鬼塚敬一訳、『ジョージ・ハーバート詩集』(南雲堂 1986) を参照した。
- 2) *The Country Parson* Ch. 22: “The time of every ones first receiving is not so much by yeers, as by understanding; particularly, the rule may be this: When any one can distingush the Sacramentall from common bread, knowing the Institution, and the difference, hee ought to receive, of what age soever.”
- 3) 臼井隆一郎、『パンとワインを巡り神話が巡る』(中公新書 1995) 200-1頁。
- 4) アンドレ・マソン、『寓意の図像学』, 末松壽訳 (白水社 1977) 22頁の図版を参照。
- 5) Troy D. Reeves, “Herbert’s *The Agonie*,” *The Explicator* 39 (fall 1980) : 2-3: “. . . vice is sending pain foraging throughout Christ’s bloodstream in search for something to eat.”

- 6) シドニー訳詩編がハーバートに及ぼした影響については、次の研究書を参照。
Louis L. Martz, *The Poetry of Meditation* (New Haven: Yale UP, 1955) 273-82;
J. C. A. Rathmell ed., *The Psalms of Sir Philip Sidney and The Countess
Pembroke* (New York: New York UP, 1963) xviii-xix; and Barbara K. Lewalski,
Protestant Poetics and the Seventeenth-Century Religious Lyric (New Jersey:
Princeton UP, 1979) 241-4.
- 7) J. C. A. Rathmell, ed., *The Psalms of Sir Philip Sidney and The Countess
Pembroke* 136. ちなみに、以下に祈禱書と欽定訳聖書の当該箇所を引用しておく。
The Book of Common Prayer (1662; Cambridge: Cambridge UP, 1968) 418:
“And in the evening they will return: grin like a dog, and will go about the
city. They will run here and there for meat: and grudge if they be not
satisfied;” and *The Holy Bible*, King James Version (New York: American
Bible Society, 1986) 548: “And at evening let them return; and let them make
a noise like a dog, and go round about the city. Let them wander up and down
for meat, and grudge if they be not satisfied.”
- 8) 山根正弘, 「ジョージ・ハーバートの『聖堂』におけるモグラのイメージトプ
セルの『動物誌』(1607)に関連して—」創価大学英文学会編『英語英文学研究』
第40号(平成9年)65-76頁参照。
- 9) 浅野順一郎, 『モーセ』(岩波新書 1977) 163-8; 189-96頁, 及び白井隆一郎,
『パンとワインを巡り神話が巡る』70; 204-7頁参照。
- 10) 聖書からの邦訳の引用は、『新共同訳』(日本聖書協会 1987)による。
- 11) *The Country Parson* Ch. 32: “. . . the improvement of his grounds, by
drowning, or draining, or stocking, or fencing, and ordering his land to the
best advantage both himself and his neighbours.”
- 12) Cristina Malcolmson, *Heart-Work: George Herbert and the Protestant Ethic*
(Stanford: Stanford UP, 1999) 150-1, 196-8.
- 13) “Whitsunday” 17-8: “But since those pipes of gold, which brought / That
cordiall water to our ground. . .”; and “The Jews” 3-4: “Whose streams we got
by the Apostles sluice, / And use in baptisme. . .”
- 14) 17世紀イギリスの詩, 特にハーバート, ヴォーンそしてトラハーンに頻繁に現れ
る「命の水」の奔流及び循環のイメージを聖書の予表論と関連して論じた, 次の
研究書を参照。Donald R. Dickson, *The Fountain of Living Waters: The
Typology of the Waters of Life in Herbert, Vaughan and, Traherne* (Columbia:
U of Missouri P, 1987) esp. 80-123.